

大学生の乳幼児に対する好意感情 —父母に対する好意感情との関連—

立川 真紀*・吉澤 千夏**

(平成30年1月31日受付；平成30年2月13日受理)

要 旨

本研究は、青年期後期である大学生を対象に、乳幼児への好意感情が形成される要因について明らかにすることを目的とする。特に本稿では、乳幼児に対する好意感情の特徴について、対象者の性別と父母に対する好意感情の視点から検討する。分析の結果、以下のことが明らかになった。

(1) 対象者の性別と乳幼児への好意感情についての分析では、男性よりも女性の方が乳幼児への好意感情が高いという結果が得られた。

(2) 対象者の性別と母親への好意感情についての分析では、母親に対する幼い頃及び現在の好意感情について有意な偏りはみられなかった。このことから、母親に対する好意感情については、性別による違いがないことが明らかになった。

(3) 幼い頃及び現在の母親への好意感情と現在の乳幼児への好意感情との関連性は認められなかった。母親への好意感情が、乳幼児への好意感情を高めることを説明することはできなかった。

(4) 幼い頃及び現在の父親への好意感情と現在の乳幼児への好意感情との間には、多くの関連がみられた。父親への好意感情は、乳幼児への好意感情を高める要因となることが示唆された。

KEY WORDS

university students 大学生, favorable feelings 好意感情, infants 乳幼児, father 父親, mother 母親

1. 緒言

近年、実父母による育児放棄や暴力などの児童虐待が後を絶たない。そしてその原因として、育児ストレスや育児不安などが取り沙汰されている。これらは少子化、核家族化、地域交流の希薄化などの社会状況の変化により、幼い子どもと接する機会が減少し、子どもとのかかわりについて十分に理解を深めることが困難なままに親となること等がその一因と考えられている。また、十分な子ども理解がないために、理想化した子どもや子育て像を抱き、それと現実とのギャップが子どもとのかかわりに影響を及ぼすのではないかと考えられる。このことから、実際に親となる前に、子どもや子育てについての知識を得て、より現実に近い子ども・育児イメージを持つことは、親となった時のギャップを低減することに有効であると考えられる。このような学びは、育児行動という親としての役割を遂行するために必要な資質や、これから親となる可能性を秘めた青年期後期の男女が親になるための「親性準備性」を身に付けることの必要性とも関連があるといえよう。

「親性準備性」とは、子どもに対する親としての役割を遂行するために必要な資質や準備性⁽¹⁾を意味し、「乳幼児への好意感情」と「育児への積極性」からなる⁽²⁾。これまでに「親性準備性尺度⁽³⁾」を用いて、大学生を対象とした「親性準備性」に関する研究は多数行われており、「親性準備性」は男性よりも女性の方が高く、その中でも「乳幼児への好意感情」は子育てボランティア体験のない学生よりも体験のある学生の方が高いことが明らかになっている⁽⁴⁾。その一方で、「育児への積極性」については、子育てボランティア体験の有無による差はみられない⁽⁵⁾という。さらに、「子どもが好きか」、「子どもに関心を持っているか」、「子どもと一緒にいると楽しいか」といった親性準備性の「乳幼児への好意感情」とほぼ同等の内容を示す「子どもへの親和」が高いほど、「子どものイメージ」が豊かになる、ということも明らかにされている⁽⁶⁾。このことから、「子どもへの親和」の高さ、つまり「親性準備性尺度⁽⁷⁾」のうち、「乳幼児への好意感情」の高さが、子どもに対するイメージの豊かさと関連しており、「乳幼児への好意感情」を育てることが青年期男女の「親性準備性」を高めることにつながるのではないかと考えられる。「親性準備性」の構築には、自分が直接、乳幼児と接するという体験だけではなく、自分が経験してきた実際の親子関係の影響を受けているとの仮説の下、大学生・大学院生に幼少期の親子関係と現在の親子関係がどのようなものであ

たかを尋ね、親子関係と親性準備性との関連を捉えた研究においては、親子関係を良好だと認知することが「乳幼児への好意感情」に有意に良い影響を及ぼしていることから、親子関係認知の良好さが親性準備性の「乳幼児への好意感情」を高めることが示唆されている⁽⁸⁾。

そこで本稿は、「親性準備性尺度⁽⁹⁾」のうち、特に「乳幼児への好意感情」に着目し、その形成にかかわるであろうと考えられる親子関係に焦点をあて、青年期後期である大学生を対象に、乳幼児に対する好意感情が形成される要因としての父母への好意感情との関連を検討することを目的とする。

2. 方法

2.1 調査対象

N県J大学に在学する学生206名である。

2.2 調査方法

調査は2015年6月8日に行う。著者のうち1名の講義終了後に調査用紙を配布し、その場で回答するよう依頼した後、回収を行う。

2.3 調査紙の構成

調査紙は、以下の内容で構成されている。

①対象者の属性

対象者の性別、年齢等。

②親への好意感情・イメージについて

幼い頃と現在において父親・母親が好きであったかどうかについて回答を求める。さらに、幼い頃と現在の父親・母親について、それぞれイメージする言葉を自由記述で3つ回答を求める。これらは、乳幼児への好意感情を左右する要因として親子関係が関連しているのではないかと考え、行うものである。また幼い頃と現在において抱く親への好意感情に違いがあるのではないかと考え、質問項目を幼い頃と現在の2つに分けている。さらに父親と母親への好意感情の違いを検討材料とするために、こちらも質問項目を父親・母親の2つに分けている。

③乳幼児への好意感情について

ここでは、青年期男女双方に使用が可能である「親性準備性尺度⁽¹¹⁾」のうち、「乳幼児への好意感情尺度」9項目を用いて、対象者の乳幼児への好意感情を捉える(表1)。回答は、「5:あてはまる」「4:ややあてはまる」「3:どちらでもない」「2:ややあてはまらない」「1:あてはまらない」の5件法により求める。分析にあたっては、「5:あてはまる」「4:ややあてはまる」を合わせて「あてはまる」群、「3:どちらでもない」「2:ややあてはまらない」「1:あてはまらない」を合わせて「あてはまらない」群とし、対象者の性別、父親・母親への好意感情との関連を明らかにする。

本調査紙ではその他にも、家族構成、子どもとの触れ合い経験・実習経験の有無、自身が親になるイメージについての質問も行っている。しかし、本稿ではその点については言及しないため、これらの説明については省略する。また、本調査紙の回答は無記名であり、個人が特定できないように配慮がなされている。

3. 結果及び考察

3.1 対象者の年齢及び性別

対象者の平均年齢は19.5歳(SD=2.4)である。また、対象者の性別は男性116名(56.6%)、女性89名(43.4%)、不明1名(4.9%)である。

表1 乳幼児への好意感情尺度⁽¹⁰⁾

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. あなたは赤ちゃんが好きですか 2. 赤ちゃんを見ると「かわいいな」と思いますか 3. 赤ちゃんのことについて知りたいと思いますか 4. 赤ちゃんに関心がありますか 5. 赤ちゃんと一緒に遊ぶことが好きですか 6. 赤ちゃんを見るとあやしたり、笑いかけたりしますか 7. 赤ちゃんを抱いてみたいと思いますか 8. 赤ちゃんの世話をすることが好きですか 9. 赤ちゃんに興味がありますか |
|--|

3. 2 乳幼児への好意感情の特徴

まず、大学生の乳幼児に対する好意感情の特徴を明らかにするために、性別によるクロス集計及びFisher's exact testによる検定を行う。その結果、全ての項目において、男子学生よりも女子学生の方が乳幼児への好意感情が高いという結果が得られた。このことから、「乳幼児への好意感情」については、男性よりも女性の方が高いとする先行研究⁽¹²⁾と同様に、性別による相違が認められる。

「育児への積極性尺度」に関する先行研究⁽¹³⁾では、男性よりも女性の方が育児をすばらしい仕事だと思っていることや育児によって自分自身もまた成長できていること、女性は育児を理想化されたイメージでとらえていることが示唆されている。また、

「親になること」に関する意識調査⁽¹⁴⁾では、特に男性より女性の方が、「親になる自信がある（自己効力感）」という項目において、「あてはまる」と回答した人が多く、その要因として、女性が産む性であることや、育児の役割分担に関する意識が影響しているということが明らかになっている。このことから、男性と比較して、子どもを出産し、育児の多くを担う可能性を感じている女性の方が、子どもや子育てについてイメージしやすいため、乳幼児への好意感情が高くなるものと考えられる。

3. 3 父母への好意感情の特徴

性別による父母への好意感情の違いを明らかにするために、まず、「性別」と「あなたは幼い頃、母親のことが好きでしたか」「あなたは現在、母親のことが好きですか」の回答についてクロス集計を行う（表3）。その結果、男子学生、女子学生ともに95%以上が幼い頃母親のことを好きだったと回答している。これらについてFisher's exact testによる検定を行った結果、有意な偏りは認められない（幼い頃：p = .685、現在：p = .686）。

このことから、性別と幼い頃の母親への好意感情については、違いがあるとはいえない。

次に、「性別」と「あなたは幼い頃、父親のことが好きでしたか」「あなたは現在、父親のことが好きですか」の回答についてクロス集計を行う（表4）。その結果、幼い頃の父親への好意感情については、男子学生は80%以上、女子学生は95%以上が幼い頃父親のことを好きだったと回答している。これらについてFisher's exact testによる検定を行った結果、有意な偏りが認められる（p = .011）。このことから、性別と幼い頃の父親への好意感情には違いがあり、女子学生の方が男子学生よりも幼い頃父親が好きだったといえる。さらに、現在の父親への好意感情についてみると、男子学生、女子学生ともに85%以上が現在父親のことを好きであると回答している。これらについてFisher's exact testによる検定を行った結果、有意な偏りは認められない（p = 1.000）。このことから、性別と現在の父親への好意感情については、違いがあるとはいえない。

表2 性別と乳幼児への好意感情のクロス集計表 n (%)

		男	女
1. 赤ちゃんが好きである (p = .005)	あてはまる	100(86.2)	87(97.8)
	あてはまらない	16(13.8)	2(2.2)
2. 赤ちゃんを見ると『かわいいな』と思う (p = .006)	あてはまる	106(91.4)	89(100)
	あてはまらない	10(8.6)	0(0)
3. 赤ちゃんのことにについて知りたいと思う (p = .001)	あてはまる	87(75.0)	82(92.1)
	あてはまらない	29(25.0)	7(7.9)
4. 赤ちゃんに関心がある (p = .004)	あてはまる	93(80.2)	84(94.4)
	あてはまらない	23(19.8)	5(5.6)
5. 赤ちゃんと一緒に遊ぶことが好きである (p = .051)	あてはまる	97(83.6)	83(93.3)
	あてはまらない	19(16.4)	6(6.7)
6. 赤ちゃんを見るとあやしたり、笑いかけたりする (p = .005)	あてはまる	97(83.6)	83(93.3)
	あてはまらない	19(16.4)	6(6.7)
7. 赤ちゃんを抱いてみたいと思う (p = .090)	あてはまる	97(83.6)	82(92.1)
	あてはまらない	19(16.4)	7(7.9)
8. 赤ちゃんの世話をすることが好きである (p = .002)	あてはまる	80(69.0)	78(87.6)
	あてはまらない	36(31.0)	11(12.4)
9. 赤ちゃんに興味がある (p = .001)	あてはまる	88(75.9)	83(93.3)
	あてはまらない	28(24.1)	6(6.7)

表3 母親への好意感情

		男	女
幼い頃、母親が好きでしたか (p = .685)	はい	91 (95.8)	83 (97.6)
	いいえ	4 (4.2)	2 (2.4)
現在、母親が好きですか (p = .686)	はい	92 (95.8)	83 (97.6)
	いいえ	4 (4.2)	2 (2.4)

表4 父親への好意感情

		男	女
幼い頃、父親が好きでしたか (p = .011)	はい	70 (82.4)	70 (95.9)
	いいえ	15 (17.6)	3 (4.1)
現在、父親が好きですか (p = 1.000)	はい	80 (87.9)	63 (88.7)
	いいえ	11 (12.1)	8 (11.3)

上記のことから、「幼い頃、父親が好きだったかどうか」においてのみ有意な偏りが認められ、男子学生よりも女子学生の方が、幼い頃の父親への好意感情が高いことが明らかになる。しかし、「現在、父親のことが好きかどうか」、「幼い頃、母親のことが好きだったかどうか」、「現在、母親のことが好きかどうか」の3つの回答には男女に偏りはない。このことから、親に対する好意感情について性別による差はほとんどないと考えられる。

よって以下の分析においては、男女データを合わせて行うこととする。

3. 4 母親への好意感情と現在の乳幼児への好意感情

ここでは、対象者の母親への好意感情と対象者の現在の乳幼児への好意感情の関連を明らかにするために、クロス集計及びFisher's exact testによる検定を行う。

3. 4. 1 幼い頃の母親への好意感情と現在の乳幼児への好意感情の関連

対象者の幼い頃の母親への好意感情と対象者の現在の乳幼児への好意感情についての分析を行う。分析の結果(表5)、乳幼児への好意感情9項目中「6. 赤ちゃんを見るとあやしたり笑いかけたりする」の1項目においてのみ、有意な偏りが認められ、幼い頃母親への好意感情が高い人ほど、赤ちゃんを見るとあやしたり笑いかけたりすることが明らかになる。しかし、その他の8項目においては、有意な偏りは認められない。このことから、幼い頃の母親への好意感情は、現在の乳幼児への好意感情を高める要因となることは少ないと考えられる。

有意な偏りが認められた、「赤ちゃんを見るとあやしたり、笑いかけたりする」とは、赤ちゃんに対し自ら働きかける態度である。そしてこのことは、自ら働きかけ

ることで、赤ちゃんからの何らかの応答を期待し、何らかのコミュニケーションを行うことを求めていると理解することもできるであろう。これは他者に対する「繋がりたい」という気持ちの表れであると同時に、他者を知り、それを受けて他者に配慮するといった相互作用が、赤ちゃんとの間に生じていることの表れでもある⁽¹⁵⁾。さらに、そのような関係性にある「おとな-子ども」間においては、何気なく行われている「文化的身振り」が世代間で伝達されていくことが知られている⁽¹⁶⁾。このことから、対象者自身が幼い頃、母親から向けられる「あやし」「笑いかけ」といった「文化的身振り」を体験することにより、母親との良好な関係が築かれ、それがベースとなって母親への好意感情が高まっていったと考えられる。さらに上記のようなやりとりの中で「文化的身振り」である「あやし」「笑いかけ」が伝達されていくことにより、幼い頃母親が好きだった人は赤ちゃんを見るとあやしたり笑いかけたりするようになるものと推察される。

3. 4. 2 現在の母親への好意感情と現在の乳幼児への好意感情の関連

次に、対象者の現在の母親への好意感情と対象者の現在の乳幼児への好意感情についての分析を行う。分析の結果(表6)、現在の母親への好意感情と乳幼児への好意感情それぞれの項目における分析では、乳幼児への好意感情9項目すべてにおいて有意な偏りが認められない。このことから、現在の母親への好意感情は、現在の乳幼児への好意感情を高める要因とはならないと考えられる。

3. 5 父親への好意感情と現在の乳幼児への好意感情

次に、対象者の父親への好意感情と対象者の現在の乳幼児への好意感情の関連を明らかにするために、クロス集計

表5 幼い頃の母親への好意感情と乳幼児への好意感情のクロス集計表 n (%)

		幼い頃、母親が好きでしたか	
		はい	いいえ
1. 赤ちゃんが好きである ($p = .366$)	あてはまる	162 (93.1)	5 (83.3)
	あてはまらない	12 (6.9)	1 (16.7)
2. 赤ちゃんを見ると『かわいいな』と思う ($p = .242$)	あてはまる	167 (96.0)	5 (83.3)
	あてはまらない	7 (4.0)	1 (16.7)
3. 赤ちゃんのことにについて知りたいと思う ($p = 1.000$)	あてはまる	146 (83.9)	5 (83.3)
	あてはまらない	28 (16.1)	1 (16.7)
4. 赤ちゃんに関心がある ($p = .548$)	あてはまる	153 (87.9)	5 (83.3)
	あてはまらない	21 (12.1)	1 (16.7)
5. 赤ちゃんと一緒に遊ぶことが好きである ($p = .512$)	あてはまる	155 (89.1)	5 (83.3)
	あてはまらない	19 (10.4)	1 (16.7)
6. 赤ちゃんを見るとあやしたり、笑いかけたりする ($p = .008$)	あてはまる	162 (93.1)	3 (50.0)
	あてはまらない	12 (6.9)	3 (50.0)
7. 赤ちゃんを抱いてみたいと思う ($p = .134$)	あてはまる	156 (89.7)	4 (66.7)
	あてはまらない	18 (10.3)	2 (33.3)
8. 赤ちゃんの世話をすることが好きである ($p = .331$)	あてはまる	141 (81.0)	4 (66.7)
	あてはまらない	33 (19.0)	2 (33.3)
9. 赤ちゃんに興味がある ($p = .222$)	あてはまる	149 (85.6)	4 (66.7)
	あてはまらない	25 (14.1)	2 (33.3)

及びFisher's exact testによる検定を行う。

3. 5. 1 幼い頃の父親への好意感情と現在の乳幼児への好意感情の関連

対象者の幼い頃の父親への好意感情と対象者の現在の乳幼児への好意感情についての分析を行う。分析の結果(表7), 乳幼児への好意感情9項目中5項目において有意な偏りが認められ, 幼い頃の父親への好意感情が高い人ほど, 乳幼児への好意感情が高いことが明らかになる。このことから, 幼い頃の父親への好意的な感情は, 現在の乳幼児への好意感情を高める要因となることが示唆される。

有意な偏りが認められた項目は「1. 赤ちゃんが好きである」, 「2. 赤ちゃんを見ると『かわいいな』と思う」, 「3. 赤ちゃんのことに興味がある」, 「9. 赤ちゃんに興味がある」である。以上の有意な偏りが認められる項目は, いずれも赤ちゃんと直接触れ合うことに関するものではなく, 赤ちゃんが好きであるということや, かわいいと思うこと, 興味や関心があるというような, 赤ちゃんに抱く正のイメージや感情を表すものである。これまで, 日本の父子関係は希薄であるといわれてきたものの, 近年, 現実の生活の中での父親の育児参加の機会が増えているといわれている⁽¹⁷⁾。父親への好意感情が乳幼児への好意的なイメージと関連していることから, 自分に対する父親の良好なかかわりが, 父親への良好な感情を生み出し, それがさらに, 自分と自分よりも年少の子どもとの良好な関係をイメージさせ, 乳幼児への好意感情の高まりとなって現れたのではないかと考えられる。

一方, 「乳幼児への好意感情尺度」の9項目のうち有意な偏りが認められないのは, 「5. 赤ちゃんと一緒に遊ぶことが好きである」 「6. 赤ちゃんを見るとあやしたり, 笑いかけたりする」 「7. 赤ちゃんを抱いてみたいと思う」のように, 具体的な子育てや子どもとのかかわりに関する項目である。このことから, 実際の子どもとのかかわりという

表6 現在の母親への好意感情と乳幼児への好意感情のクロス集計表 n (%)

		現在, 母親が好きですか	
		はい	いいえ
1. 赤ちゃんが好きである (p=.365)	あてはまる	163 (93.1)	5 (83.3)
	あてはまらない	12 (6.9)	1 (16.7)
2. 赤ちゃんを見ると『かわいいな』と思う (p=.267)	あてはまる	167 (95.4)	5 (83.3)
	あてはまらない	8 (4.6)	1 (16.7)
3. 赤ちゃんのことに興味がある (p=1.000)	あてはまる	145 (82.9)	5 (83.3)
	あてはまらない	30 (17.1)	1 (16.7)
4. 赤ちゃんに関心がある (p=.567)	あてはまる	153 (87.4)	5 (83.3)
	あてはまらない	22 (12.6)	1 (16.7)
5. 赤ちゃんと一緒に遊ぶことが好きである (p=.528)	あてはまる	155 (88.6)	5 (83.3)
	あてはまらない	20 (11.4)	1 (16.7)
6. 赤ちゃんを見るとあやしたり, 笑いかけたりする (p=.409)	あてはまる	161 (92.0)	5 (83.3)
	あてはまらない	14 (8.0)	1 (16.7)
7. 赤ちゃんを抱いてみたいと思う (p=.510)	あてはまる	156 (89.1)	5 (83.3)
	あてはまらない	19 (10.9)	1 (16.7)
8. 赤ちゃんの世話をすることが好きである (p=.328)	あてはまる	142 (81.1)	4 (66.7)
	あてはまらない	33 (18.9)	2 (33.3)
9. 赤ちゃんに興味がある (p=.591)	あてはまる	146 (83.4)	6 (100.0)
	あてはまらない	29 (16.6)	0 (0)

表7 幼い頃の父親への好意感情と乳幼児への好意感情のクロス集計表 n (%)

		幼い頃, 父親が好きでしたか	
		はい	いいえ
1. 赤ちゃんが好きである (p=.090)	あてはまる	113 (95.0)	15 (83.3)
	あてはまらない	7 (5.0)	3 (16.7)
2. 赤ちゃんを見ると『かわいいな』と思う (p=.033)	あてはまる	136 (97.1)	15 (83.3)
	あてはまらない	4 (2.9)	3 (16.7)
3. 赤ちゃんのことに興味がある (p=.042)	あてはまる	121 (86.4)	12 (66.7)
	あてはまらない	19 (13.6)	6 (33.3)
4. 赤ちゃんに関心がある (p=.056)	あてはまる	125 (89.3)	13 (72.2)
	あてはまらない	15 (10.7)	5 (27.8)
5. 赤ちゃんと一緒に遊ぶことが好きである (p=.397)	あてはまる	127 (90.7)	15 (83.3)
	あてはまらない	13 (9.3)	3 (16.7)
6. 赤ちゃんを見るとあやしたり, 笑いかけたりする (p=.645)	あてはまる	129 (92.1)	16 (88.9)
	あてはまらない	11 (7.9)	2 (11.1)
7. 赤ちゃんを抱いてみたいと思う (p=.142)	あてはまる	131 (93.6)	15 (83.3)
	あてはまらない	9 (6.4)	3 (16.7)
8. 赤ちゃんの世話をすることが好きである (p=.114)	あてはまる	116 (82.9)	12 (66.7)
	あてはまらない	24 (17.1)	6 (33.3)
9. 赤ちゃんに興味がある (p=.068)	あてはまる	124 (88.6)	13 (72.2)
	あてはまらない	16 (11.4)	5 (27.8)

点においては、幼い頃の父親への好意感情の高低に影響を受けないのではないかと考えられる。

3. 5. 2 現在の父親への好意感情と現在の乳幼児への好意感情の関連

次に、対象者の現在の父親への好意感情と対象者の現在の乳幼児への好意感情についての分析を行う。分析の結果（表8）、乳幼児への好意感情9項目中4項目において、有意な偏りが認められ、現在父親への好意感情が高い人ほど、乳幼児への好意感情が高いことが明らかになる。この結果から、現在の父親への好意的な感情は、現在の乳幼児への好意感情を高める要因となると考えられる。

有意な偏りが認められる項目は「1. 赤ちゃんが好きである」、「3. 赤ちゃんのことにについて知りたいと思う」、「4. 赤ちゃんに関心がある」、「8. 赤ちゃんの世話をすることが好きである」であった。これらは、前項の、幼い頃の父親への好意感情の分析と同様、赤ちゃんが好きということや、知りたい・

関心があるというものであり、いずれも父親を好きであると回答する者の方が、好きではないと回答する者よりも有意に乳幼児に対する好意感情が高い。しかし、前項では「2. 赤ちゃんを見ると『かわいいな』と思う」に有意な偏りが認められるものの、本項の分析では認められない。調査対象者は教育大学に通う学生であり、将来教員や保育士を目指す学生がほとんどである。そのため、対象者の多くは子どもが好きであり、赤ちゃんを見ると「かわいい」と回答する人が多いため、現在の父親への好意感情との間に違いがみられなかったと考えられる。

一方、前項で有意な偏りのみられなかった「8. 赤ちゃんの世話をすることが好きである」に有意な偏りが認められる。「世話をされる」ことに必要な了解は、「他者との関係性の了解」であり、「親になること」は「親子を中心とする他者との関係性の了解」である⁽¹⁸⁾ともいえる。今回の分析結果から、現在、父親に好意感情をもっている人は、父親との関係が良好であると認識している可能性が高く、「自分と父親」という親子関係を「正」のものとして捉えていると考えられる。父親を好きではない人と比べ、父親を好きであり、父子関係を良好だと捉えている人は、自分がかかわってきた父親のように、相手に対して好ましいかわりを行おうとしている、つまり、良好な関係性を了解する父親を「世話をする」者の一種のモデルとし、さらに乳幼児を「世話をされる」者として捉えていることが考えられる。このことが、現在、父親に好意感情をもっている人が、もたない人よりも「赤ちゃんの世話をすることが好きである」と回答するに至る要因となることが推察される。

4. おわりに

本研究は、青年期後期である大学生を対象に、乳幼児への好意感情が形成される要因について、対象者の性別と父母に対する好意感情の視点から検討したものである。分析の結果から、父親への好意感情が対象者自身の乳幼児に対する好意感情に影響を及ぼすことが示唆された。しかし、紙面の都合上、父親への好意感情が形成される要因についての分析には至っていない。今後、上記の課題を含め、乳幼児に対する好意感情の形成要因に関する分析を行い、「技術・家庭」等における「保育」教育・学習等に寄与するデータを提供することが求められる。

表8 現在の父親への好意感情と乳幼児への好意感情のクロス集計表 n (%)

		現在、父親が好きである	
		はい	いいえ
1. 赤ちゃんが好きである (p=.037)	あてはまる	135 (94.4)	15 (78.9)
	あてはまらない	8 (5.6)	4 (21.1)
2. 赤ちゃんを見ると『かわいいな』と思う (p=.191)	あてはまる	138 (96.5)	17 (89.5)
	あてはまらない	5 (3.5)	2 (10.5)
3. 赤ちゃんのことにについて知りたいと思う (p=.094)	あてはまる	122 (85.3)	13 (68.4)
	あてはまらない	6 (31.6)	6 (31.6)
4. 赤ちゃんに関心がある (p=.026)	あてはまる	127 (88.8)	13 (68.4)
	あてはまらない	16 (11.2)	6 (31.6)
5. 赤ちゃんと一緒に遊ぶことが好きである (p=1.000)	あてはまる	127 (88.8)	17 (89.5)
	あてはまらない	16 (11.2)	2 (10.5)
6. 赤ちゃんを見るとあやしたり、笑いかけたりする (p=.389)	あてはまる	131 (91.6)	16 (84.2)
	あてはまらない	12 (8.4)	3 (15.8)
7. 赤ちゃんを抱いてみたいと思う (p=.233)	あてはまる	129 (90.2)	15 (78.9)
	あてはまらない	14 (9.8)	4 (21.1)
8. 赤ちゃんの世話をすることが好きである (p=.034)	あてはまる	116 (81.1)	11 (57.9)
	あてはまらない	27 (18.9)	8 (42.1)
9. 赤ちゃんに興味がある (p=.153)	あてはまる	125 (87.4)	14 (73.7)
	あてはまらない	18 (12.6)	5 (26.3)

なお、本研究の一部は、平成27年度上越教育大学卒業研究（立川真紀）において、発表されている。
本研究にご協力くださいました皆さまに心より感謝申し上げます。

引用文献

- (1) 岡本祐子・古賀真紀子（2004）青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析：広島大学心理学研究 第4号 159-172.
- (2) 佐々木綾子（2007）親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討：福井大学医学部研究雑誌 第8巻 第1号・第2号合併号 41-50.
- (3) 前掲（2）
- (4) 川瀬隆千（2010）大学生の親準備性に関する研究：宮崎公立大学人文学部紀要 第17巻 第1号 29-40.
- (5) 前掲（3）
- (6) 伊藤葉子（2005）中・高校生の「子どもイメージ」の発達：千葉大学教育学部研究紀要 第53巻 85-90.
- (7) 前掲（3）
- (8) 小林真（2014）認知された親子関係は大学生の親性準備性にどのような影響を及ぼすか：富山大学人間発達科学部紀要 第8巻 第2号 43-48.
- (9) 前掲（3）
- (10) 前掲（2）
- (11) 前掲（2）
- (12) 前掲（2）
- (13) 前掲（4）
- (14) 後藤さゆり・奥田雄一郎・平岡さつき・呉宜児・大森昭生・前田由美子（2010）青年期における『親になること』の教育的意義の検討 共愛学園前橋国際大学論集(10) 207-218.
- (15) 鯨岡峻（1997）「原初的コミュニケーションの諸相」，ミネルヴァ書房，129-191.
- (16) 鯨岡峻（1999）「関係発達論の構築」，ミネルヴァ書房，1-20.
- (17) 大野祥子・柏木恵子（1997）第6章：「父親」「児童心理学の進歩vol.36」，金子書房，124-147.
- (18) 前掲（14）

The relationships between the favorable feelings of university students towards infants and their favorable feelings towards their fathers and mothers.

Maki TACHIKAWA* · Chinatsu YOSHIZAWA**

ABSTRACT

The purpose of this research is to clarify factors which lead to favorable feelings towards infants in university students who were late adolescents. We aimed to investigate the characteristics of favorable feelings towards infants, from the viewpoint of gender of the subjects, and their favorable feelings towards their fathers and mothers. The results of the analysis are as follows:

1. Females had a higher level of favorable feelings towards infants than males.
2. When examining favorable feelings towards mothers, it became clear that this did not differ according to gender. On the other hand, in the case of favorable feelings towards fathers, when comparing males and females in their childhood, more females liked their fathers than males did.
3. When the subjects were children, or at present, there was no relationship between favorable feelings towards the subject's mothers and their favorable feelings towards infants. Favorable feelings towards mothers was not a factor in their favorable feelings towards infants.
4. When the subjects were children, or at present, there was some relationship between favorable feelings towards the subject's fathers and their favorable feelings towards infants. Favorable feelings towards fathers was one of the factors in their favorable feelings towards infants.